

永とわ遠に花咲く庭

—— 17-19世紀の西洋植物画 ——

2009年12月12日[土]～2010年4月4日[日]

西洋植物画の発展の歴史を紹介



より美しくより可憐に

永遠に咲き誇る版画の花束

©2009 Museum of Fine Arts, Boston. All rights reserved.

- [開館時間] 平日:午前10時～午後7時
土・日・祝・休日:午前10時～午後5時(入館は閉館の30分前まで)
月曜日(祝日・振替休日の場合はその翌日)
年末年始:12月28日～1月1日
- [入館料金] 一般:1,200円(1,000円)
シルバー・学生:900円(700円)
中学生以下:無料
()内は前売/団体および平日午後5時以降の割引入館料金、
シルバーは65歳以上
- [主催] 名古屋ボストン美術館、ボストン美術館

平日は午後7時まで開館

- [交通案内] JR東海道・中央本線/地下鉄名城線/
名鉄名古屋本線「金山」駅下車南口前
〒460-0023 名古屋市中区金山町1-1-1
TEL 052-684-0101 FAX 052-684-0738
<http://www.nagoya-boston.or.jp/>
- [お問合せ]

金山駅南口前



名古屋ボストン美術館
NAGOYA / BOSTON MUSEUM OF FINE ARTS

【展覧会概要】

ヨーロッパでは古くから、植物画は薬草の知識を伝えるために描かれてきました。やがて15世紀末からの大航海時代以降、多くの外来植物がヨーロッパへ流入しはじめると、それを解明するために植物学が誕生します。これと並行して発達を遂げた版画技法と結びつき、科学的な正確さと芸術的な美しさを兼ね備えた植物画が数多く制作されるようになります。特に18世紀後半から19世紀前半は「植物画の黄金時代」と呼ばれ、植物画は大眾へと広まっていきました。本展覧会では17～19世紀に制作された114点の植物画の秀作を選び、時を越えて色鮮やかに咲き続ける花々の魅力とともに、西洋植物画の発展の歴史を紐解いていきます。

プロローグ

1613年、ニュルンベルク出身の本草家バジル・ベスラーは『アイヒシュテット庭園植物誌』を出版しました。この書物は、最も初期の銅版エングレーヴィングによる大型本の一つです。それと同時に、薬草の図解としてだけでなく、植物の特徴や美しさを表すための植物画への転換期を示す作品としても重要です。本作の影響はヨーロッパの広範囲に及び、特にニュルンベルクでは後代で数々の美花選の基準となりました。(作品①)



①『アイヒシュテット庭園植物誌』
バジル・ベスラー 1713年 エングレーヴィング
Bequest of George P. Dike-Elita R. Dike Collection 69.97



②『さまざまな花の写生集』
ジャン＝バティスト・モノワイエ 1660-80年 エッチング
Maria Antoinette Evans Fund 30.1331.8

1. 17世紀フランスの植物画にみる二つの傾向

17世紀のフランスでは、植物画において科学的傾向と装飾的傾向の二つが発展しました。どちらも17世紀の初め、王立植物園の造園にとともに、百科全書的な植物園を求める新しい流れから生まれたものでした。科学的傾向によって植物は可能な限り正確に描き出された一方、装飾的傾向はフランスの装飾芸術の普及を促しました。この時代、自由で繊細な表現を可能とするエッチングは、咲き誇る豪華な花束の素描を複製する際に好まれた技法でした。(作品②)



④『植物図鑑』
クリストフ・ヤーコプ・トルー 1750-73年 エングレーヴィング
Bequest of George P. Dike-Elita R. Dike Collection 69.186

2. 18世紀：芸術と科学の結合

植物学は17世紀末から18世紀初めにかけて急速に発展し、ロンドンとニュルンベルクが植物学の活動の中心地となりました。植民地化によって世界各地から多様な植物がヨーロッパ大陸にもたらされると、植物学は流行の学問となり、18世紀半ばには、リンネによって植物の分類体系が整えられました。植物画では植物の全体から花自体に目が向けられ、芸術的かつ科学的な植物画が生みだされました。(作品③、④)



③『スリナム産昆虫図譜』
マリア・シビラ・メリアン 1705年 エングレーヴィング
Bequest of George P. Dike-Elita R. Dike Collection 69.243

3. フランスにおける新たな発展

18世紀末にフランスの植物画は科学的伝統と装飾的伝統が結合し、19世紀のフランスは植物画制作の最前線となりました。しかし装飾的な花の絵画は依然として人気があり、装飾産業におけるモチーフとして好んで使われました。そのため花をより美しく現実的に再現するような版画技法が用いられ発展しました。(作品⑤)



⑤『中国・ヨーロッパ美花精選図集』
ビエール＝ジョゼフ・ビュショー 1776年 エッチング
Bequest of George P. Dike-Elita R. Dike Collection 69.106



4. ルドゥーテとソーントンの時代:19世紀のフランスとイギリス

19世紀フランスでは、ナポレオン皇后ジョゼフィーヌに重用された植物画家ルドゥーテによって、美しくかつ科学的に正確な植物画が制作されました。またイギリスでは、植物学者で園芸家のウィリアム・カーティスが科学的な情報を掲載した「ボタニカル・マガジン」を出版し、植物画を大衆へと普及させます。一方ロバート・ジョン・ソーントンは、様々な製版技法を駆使して芸術的に優れた『フロラの神殿』を出版しました。この時代、フランスとイギリスでは、植物学的と芸術的という異なる立場の植物画が生み出されました。

(作品⑥)

⑥『フロラの神殿』ロバート・ジョン・ソーントン 1799年 エンGRAヴィング
Bequest of George P. Dike-Elita R. Dike Collection 69.314



5. 焦点の変化:庭園全体からひとつひとつの種へ

植物画は、次第にバラやツバキといった単一の属を選んで描かれるようになります。数あるバラの本のうち、ルドゥーテの『バラ図譜』は、図版の技術的完成度と繊細な色彩において、あらゆる植物画のなかで最も美しいものといえます。またツバキは、18世紀の初めに日本からヨーロッパに輸入されて以来人気となり、多くの植物画に取り上げられました。

(作品⑦、⑧)

⑦『バラ図譜』ピエール・ジョゼフ・ルドゥーテ 1817年 エンGRAヴィング
Bequest of George P. Dike-Elita R. Dike Collection 69.286



⑧『ツバキ図誌』サミュエル・カーティス 1819年 エッチング
Bequest of Katharine Lane Weems 1989.656a

6. 石版刷り技法(リトグラフ)

1854年にボストンで出版された『オオオニバス』には、開花の過程が6点の図版で描写されています。ここに、特定の植物種に特化された植物画の最終段階を見ることができます。またこの作品には、多色石版刷りという19世紀初めの最も重要で新しい版画技法が用いられています。石版刷りは、画家の構想が直接作品に反映され、制作過程が容易で経済的であることから、広く普及しました。

(作品⑨)

⑨『オオオニバス:アメリカの巨大スライム』ヨハン・フィスク・アレク 1854年 リトグラフ
Gift of Charles D. Childs 48.60



エピソード:時代の終焉

1839年に写真が発明されると、伝統的な植物画に終止符が打たれ、紙にインクで描かれた美しい植物画の時代は終わりを告げました。しかし、趣味としての要素が加わった植物画は、植物を愛する人々の中で今も色あせることなく描かれ続けています。

©2009 Museum of Fine Arts, Boston. All rights reserved.

【関連イベント】

講演会

「ボストン美術館のコレクションでたどる植物画の歴史」

日時:12月12日[土] 14:00~15:30

場所:名古屋都市センター 11階 大研修室

講師:ナンシー・キラー(ボストン美術館 研究員)

定員:150名/聴講無料/当日先着順

※定員になり次第お断りする場合があります。

講演会

「描かれた植物をみる楽しみ」

日時:1月23日[土] 14:00~15:30

講師:大場秀章氏 東京大学名誉教授

当館学芸員によるギャラリートーク

日時:1月30日[土]、2月20日[土]、3月27日[土]

※各日とも14:00~14:30

【本展覧会に関するお問い合わせ先】

名古屋ボストン美術館 〒460-0023 名古屋市中区金山町1-1-1 <http://www.nagoya-boston.or.jp/>

広報部:那須・加藤 (052-684-0752) s-nasu@nagoya-boston.or.jp 学芸部:井上・比戸 (052-684-0786)